

第14号

札幌交響くらぶ

発行／札幌交響くらぶ
 (財)札幌交響楽団内
 札幌市中央区中島公園1番15号
 (札幌コンサートホール内)
 電話 011-520-1771
 F A X 011-520-1772

初の定演後の交流会開催

会員と楽員なごやかに歓談



札幌交響くらぶとしては初めての試みとなる定期演奏会終了後の交流会が、9月20日第427回定期演奏会終了後、キタラのレストランで開催されました。

楽員との交流会は、札幌交響くらぶの活動の柱の一つですが、演奏会終了後に実施してはという希望が強く、既に2回「札幌交響くらぶコンサート」後に実施しました。しかし、これは「打ち上げ」的な要素もあり、定期演奏会後の実施が可能か課題となっていました。

今回、会長の提案により、実施に踏み切ることに、会員・楽員に案内したところ、予想を上回る参加申し込みがあり、当日の飛び入り参加を含め、会員46人、楽員42人、札幌事務局6人の計94人の参加者となりました。

山科会長の音頭で乾杯後、会場のあちこちでファンと楽員がなごやかに歓談し、また何人かの楽員のスピーチもあり、交流会はスタッフの予想以上に好評のようでした。



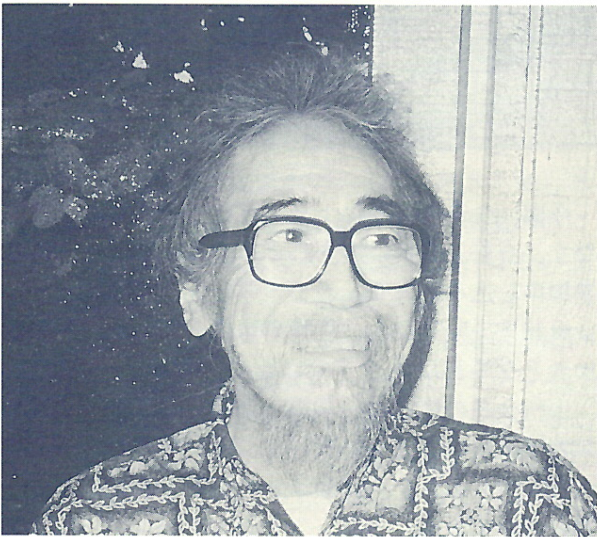
指揮者にきく

作曲家・指揮者

山本直純さん

やまもと なおずみ

札幌くらぶに
心から拍手を!!



山本直純さんのプロフィール

1932年東京生まれ。東京芸術大学作曲科に入学し、後に指揮科に転じる。在学中よりラジオ、テレビ、レコード、映画等の各分野で才能を発揮する。72年小澤征爾とともに新日本フィルハーモニーを設立、指揮者団幹事となる。73年より10年間テレビ番組「オーケストラがやって来た」の音楽監督、またテレビCM等に出演し広く知られる。74年国連委嘱作品「人」を作曲、ニューヨーク国連会議場をはじめ、パリ、ロンドン、西ドイツ各地で演奏され絶賛された。79年には日本人として初めてポストン・ポップスを指揮した。82年より98年まで毎年大阪城ホールで「一万人の第9」を構成・指揮。クラシックの大衆化に力を注ぎ、その功績は大きい。また、人気映画シリーズ「男はつらいよ」の音楽担当としてもよく知られている。作曲・指揮の音楽活動にとどまらず、最新刊の「紅いタキシード」等、著作も多い。

9月1日「名曲シリーズ」の練習日、ご存知“ヒゲの直純さん”に、芸術の森ゲート前のしゃれた喫茶店「カフェ フェルマータ」で、マエストロお気に入りハーブティーをお楽しみいただきながらお話をうかがいました。

— 山本直純さんというと、まず作曲家というイメージが強いのですが、今までに何曲くらい作曲なさったのですか。

山本 このおたずねが一番の難物ですね。CMなんかも含めると、一時期は年間に100曲くらい作っていましたし、48作の「トラさんシリーズ」だけでも、1作に20曲くらい作っていましたから、正直なところ数え切れないということだと思います。

作曲家にとって大切なことは、「忘れる」ということなのです。自分の作った曲を忘れなければ、次の新しい曲は作れない。だから私は自分の曲を次々に忘れていきます。何曲作ったのか、自分にも分かりませんね。

— その多くの曲の中で思い出深い曲はありますか。

山本 北海道関連では、札幌の「マイタウン・コンサート」のテーマソング。それと、最も思い出深いのは、札幌冬季オリンピックの入場行進曲をJOCから委嘱され「白銀の栄光」というマーチを作曲したことでしょうか。

— 作曲家として以外に、今回のように指揮者としてもご活躍ですが、どちらに魅力をお感じですか。

山本 元々、指揮というのはハイドン、モーツァルトの時代では、自分の作った曲を音楽的に完成させるということで行なわれていたと思うのです。それが、マーラーやリヒャルト・シュトラウスの頃から、自分の曲だけではなく他人の曲も音楽的に作りあげる、ということに指揮者というものが独立してきたと思います。その後には、例えば、小澤さんや札幌の尾高さんのように、最初から指揮者になることを目指して勉強する人が出てくるようになりました。私は、小澤さんや札幌の桂冠指揮者の岩城さんなんかの同世代ですが、元々指揮者になるつもりで勉強したわけではありません。芸大の作曲科の学生時代、指揮科というのができまして、山田一男先生や渡邊暁雄先生など4人の先生がいらっしゃったのですが、学生は一人もいない。このままでは指揮科は廃止になってしまうというので、渡邊先生から「きみ、指揮科に来てよ」とお誘いを

受けまして、それならと転科したのが始まりなのです。ですから、どちらも音楽家としての魅力はありますが、私のホームグラウンドはやはり作曲なのでしょうね。

—— 札幌とのかかわりについてお聞かせください。

山本 札幌の前身とも言うべき「札幌市民オーケストラ」や、NHKの札幌放送管弦楽団とのおつき合いからですから長いですよ。札幌には斎藤秀雄先生に言われたりして、アマチュアオーケストラの時代から、ほとんど毎年来ては、下指揮をしたりしていました。ですから、その後でできた札幌の創草期からのおつき合いとっていいでしょう。

—— その頃の札幌と今の札幌についての印象をお聞かせください。

山本 一言で言わせてもらえれば「雲泥の差」ということでしょうね。

一部の特殊なオーケストラを除いて、一つのオーケストラが完璧なプロのオーケストラとしてでき上がるまでには、最低10年はかかると思います。創立以来40年たった札幌は、私は間違いなく日本を代表する、正真正銘のプロのオーケストラの一つだと思います。これは、決して私の思いこみではないと思います。その証拠に、東京で聞いていると、多くの指揮者の方たちが札幌に行くたびに「札幌はいいね」ということをおっしゃる。創草期から知っている私としては、「よくぞここまで来たものだ」という気持ちで、本当にうれしい限りです。

—— そういう札幌に対するお気持ちをお持ちの山本さんから、今後の札幌に望むことをお聞かせください。

山本 大まかにいって二つあります。

一つは、21世紀は今まで以上に個性の時代になると思います。オーケストラも今以上に個性を求められるようになるだろうと思います。だから、単に同じ北国の風土だからシベリウスの2番が札幌らしいなんていうのではなく、もっと「これぞ札幌」というオーケストラの音、そしてイメージを確立していただきたい、ということです。

二つ目は、ヨーロッパのオーケストラでは当たり前のことですし、尾高さんも述べておられるようですが、やはり、ある意味で「わが町のオーケストラ」という気持ちを市民の皆様へ植えつける努力をしていただきたい。音楽というものは演奏する側と聴く側との意

志の疎通があってはじめて成立するものだと思います。北海道民、札幌市民の皆様にはぜひとも、札幌がより素晴らしいオーケストラになってくれるよう応援していただきたい。一方で楽員の皆さんも、プロとして、決してマンネリにならずに、どんな演奏会であっても心を込めて音楽を作っていていただきたい。そして、ファンの皆様と人間的なふれあいを作るよう努力していただきたい。楽員一人一人の人間的魅力が聴衆の皆様につたわらなければ、本当の音楽は生まれない。楽員の皆さんの一人一人に聴衆の皆様が魅力を感じなければ、音楽的な魅力も生じようがない



いということをお肝に銘じていただきたいと思っています。

—— 音楽家として、今後の人生への夢をお聞かせください。

山本 私は、一人でも多くの人、特に若者に音楽を愛してもらいたいと思っています。今後、その担い手である若者を育てていくということ、それが指揮という面からでも、作曲という面からでも、どんなにかかわりでもよいのですが、そういう人たちに何らかの力をかけてあげられたらよいな、と考えています。

—— ありがとうございます。最後に、私達札幌くらぶの活動にご感想を。

山本 これは多言を要しません。「拍手喝采」ただその一言です。

—— ありがとうございます。

(インタビューー 佐藤良次)

札幌40年の歩み—事務局と練習場の変遷—

札幌交響楽団前ステージ・マネージャー 海藤 正吾

前号に続き、前ステージ・マネージャー海藤さん（9月末定年ご退職）の思い出の続きを掲載します。昭和49年から62年まで北海道青少年会館が練習場になったところからの続きです。

事務局はその間一時的に、市民会館1階に戻るようになるが、昭和51年、大通西13丁目、元の高等裁判所の資料館へと移ることになった。この頃、練習場を資料館内、元の法廷のスペースを使用する案が出た。室内の反響音が大きかったため、音を吸収する布袋を数10袋程吊して実験を試みたものの、絶対的なスペースが足りず、話で終わってしまった。

昭和52年7月札幌市教育文化会館がオープンする。事務局と練習場が離れるにしたがい、現場の仕事も徐々に専門職へと分離せざるを得なくなっていた。私の仕事はステージと楽譜の兼務となり平成7年まで続いたが、理解を得てその年、若き専門の楽譜係が生まれた。

事務局は教育文化会館西側の2階へと移り、その後、平成9年7月札幌コンサートホール(KITARA)のオープンと同時にその1階へと入館し、現在に至っている。

練習場の話題は、実はもう一つある。教育文化会館建設の折の、現在の小ホールの地下、大リハーサル室の場所である。ただ、楽器搬出入口、楽器置き場、楽譜室、合唱団を入れた場合のスペースが確保されておらず、立ち消えとなった。

昭和62年芸術の森がオープンし、練習場は移転した。しかし、PMFが開幕する。60~100名程度のオーケストラの入る場所は、当時、大練習室1室のみであった。PMFと、芸術の森の自主公演バレエ・セミナーとで7・8月はシャットアウトだ。夏の甲子園ではないが、阪神タイガースと同じケースで流浪の旅に出るしかない。

前練習場の青少年会館から始まり、駅前の日生ビル、ナショナルビルの会議室、大谷短大、藤学園講堂、市立高等専門学校体育館、HBC、S TV、NHKのテレビスタジオ等、結構探しまわり、皆々様のお世話になった。



平成7年芸術の森第2期工事が完了し、アリーナが完成する。そして大練習場は改装されたが、反響板は取り壊され、照明は暗くなり、音響はチョー・デッド化し、音楽関係の練習場としては改悪となった。オーケストラの入るスペースは二つになって、流浪の旅は無くなってきたもののまだ悩みはある。

最近、大阪フィルと名古屋フィルの練習場を見学する機会があった。事務局と同一のビルで、会議室や個人練習室を多く備えた立派な環境だ。空き日には、他の団体に貸すことがあるとのことだが、ステージの管・打楽器の山台のセットは原状復元が条件とのことで、オーケストラ・スタッフにとっては大変助かっているとのこと。

上を見れば切りがないとはいえ、また上を見なければ進歩もない。現アリーナは札幌の専用練習場ではなく、スケジュールにそって練習のたびに山台を組み、椅子を並べ、譜面台を立て、そして終わっては、また片付ける、の繰り返しである。

東京都墨田区の「すみだトリフォニーホール」と新日フィルとの間で、日本初のフランチャイズ契約を結び、練習場としても使用することが可能になった。オーケストラとホールの関係も、今までにない方式で時代とともに変わりつつある。今後、札幌においても芸術の森、札幌コンサートホールを統括している札幌市芸術文化財団が、札幌の次世代に向かって大英断で接していただければ、と願ってやまない。

あとがきの文章で大変恐縮ですが、今回、掲載

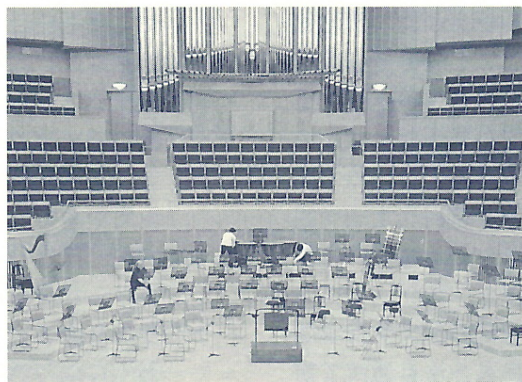
の機会を提供して下さった「札幌くらぶ」の皆様、そして、30数年前、ただの一音楽ファンで、ド素人の私を支えて下さった諸先輩の方々に、この場をお借りしてお礼申し上げます。

平成12年8月7日

海藤 正吾

(前号の文章中の演奏回数に誤りがありました。次のように、お詫びして訂正させていただきます。

36年度22回、37年度51回、38年度71回、39年度74回、40年度57回です。)



KITARA大ホールのセッティング

札幌物語 XIV

道内公演 4

～一度あることは二度ある～



暮れにベートーベンの「第9交響曲」が演奏されるのは、第二次大戦後に日本で生まれた良い習慣の一つでしょう。

道内でも札幌が誕生して4年目（1965年）に小樽市民会館で、満員の聴衆を前に行なわれたのを皮切りに、各地で第9合唱団を組織して、札幌との「第9」が演奏されるようになりました。

室蘭では1969年12月11日に、ペーター・シュヴァルツ指揮で室蘭文化センター大ホールで行われました。

室蘭は、富士鉄室蘭工場時代から会社自身が音楽活動に熱心で、吹奏楽団が全国コンクールの職場部門で日本一を誇り、新日鐵室蘭になってからも、市民の文化への関心のきわめて高い街でした。

企業がバックアップする音楽鑑賞団体の室蘭音楽文化協会が、東京と室蘭だけでしか公演されない「アダモ」の公演を行なうなど、きわめて強力な企画をしていたのです。

1964年にオープンした室蘭文化センターは、開館と同時に、利用率の高いホールになりました。しかし、このホールも当時のホールの例に漏れず、ステージの奥行きは狭かったのです。「第9」の演奏の時、札幌にくっつくように、後ろに約150人の合唱団が立ったまま山台に上がりました。

第3楽章の前に、静々と合唱団は舞台上に上がりました。ホルン奏者の私の背後には、男声陣が立っていました。

第3楽章が終わって、第4楽章がまさに始まろうとした時、私の後ろでガタンと大きな音が出て、バスパートが乗っている山台の片側がはずれ、あわやという時、男声陣はすかさず降りて山台を元通りに直し、何事もなかったように第4楽章が始まりました。その後5年間続いた室蘭の「第9」公演はしばらく間が空き、1986年12月21日、久々の「第9」公演が行なわれました。合唱団への参加希望者が多く大合唱団になり、会場も広い室蘭市新日鐵体育館に移りました。合唱団の中には、昭和27年に札幌で初めて行なわれた「第9」を歌った、当時の岩田正志室蘭市長も加わっていました。合唱団は第1楽章からステージの山台に着席していました。

指揮は故山田一男氏、第4楽章の合唱が始まる直前に、合唱団は一斉に立ち上がりました。そのはずみで、ソプラノ7人が乗った高さ1mの山台が崩れ落ちました。勿論、演奏は一時中断、しかし7人の中に居た72歳のご婦人の「先生、歌います」の一言で再開されました。

終演と共に、満席の聴衆は会場が揺れるような盛大な拍手を送りました。

(竹津宜男)

オーケストラなんでもQ&A

Q. ブルックナーの交響曲を演奏する時、ホルン奏者がホルンとは違う楽器を演奏していましたが、何という楽器で、ブルックナー以外でも使われませんか？

A. 楽器の名前は「ワーグナー・テューバ」と言います。ワーグナーによって考案されたため、この名がついて

います。

ホルンの音色で、もつと低い音を響かせる楽器です。ワーグナーの楽劇「神々の黄昏」や、リヒャルト・シュトラウスの「アルプス交響曲」、それに、ストラヴィンスキーの「春の祭典」など、大編成で演奏する音楽で使われます。

PLAYER'S TALK

札幌交響楽団 首席トランペット奏者

まつだ つぐふみ
松田 次史 さん

トランペット奏者になったきっかけは何ですか

小学生の頃、3つ年上の兄が中学校の吹奏楽部でトランペットをやっていたので、家に持ち帰ったトランペットに興味があり、いたずらして怒られたりしていました。その後、中学校の吹奏楽部で念願のトランペットをやり、フルートの森さんと同じ岡山の高校に進学した頃に、一生トランペットをやれば良いなと思い始めました。

ご両親はすぐ認めてくださいましたか

いえ、父はかなり強烈に反対でした。私の場合、母が父を説得してくれ、自分の希望が活かされることになりました。

札幌入団のいきさつをお聞かせください

私は東京芸大卒業後、ベルリンのカラヤン・アカデミーというオーケストラプレイヤー養成を専門にした学校に留学し、ベルリン・フィルなんかにも出さしていただいたりしたのですが、帰国後、とにかくオーケストラで演奏したいと思っていました。当時、東京のオーケストラには空きがなく、困ったなと思っていたら札幌の楽員募集があり、すぐオーディションを受けました。

北海道に来ることに抵抗はありましたか

それは全くありませんでした。むしろ、札幌はベルリン、ザルツブルグ、ウィーンなんかになんか共通した雰囲気のある町で、魅力的でした。

これまでの演奏活動で思い出に残っていることをお聞かせください

8年くらい前ですが、ベルリンで教えを受けた、マルティン・クレツァー先生が同じベルリン・フィルのホルン・セクションの方々と来札幌、山下一史さんの指揮で札幌の特別演奏会に出演されました。その時、先生と一緒に、それも自分のオーケストラで演奏できたことですね。



何か趣味はお持ちですか

ないこともありませんが……。実は、ご存知かと思いますが、2年程前に病気になりまして、かなり長期間仕事を休ませて頂きました。

吹きたくても吹けないという状況で、かなり絶望的な気持ちに追いやられました。その時、私を支えてくださったのは、ファンの皆様であり、オケの仲間、そして事務局の方々でした。ようやく復帰させて頂いた時に、自分の人生で今が一番大切な時だと心から思いました。支えてくださった皆様のご恩に報いるために、よりよい演奏が出来ればという気持ちでいっぱいです。

ですから、今は趣味どころではない、というのが実感ですね。

札幌と札幌くらぶの関連についてのお考えをお聞かせください

札幌は「オラが町のオケ」「道産子のオケ」として、北海道の大地に根ざしたオケでありたいと願い努力しています。札幌特有の音やスタイルを後輩へと受け継いでいくオーケストラでありたい。そして何よりも道民の皆様に愛され、必要とされる存在でありたいし、それを目指す一員であることを誇りに思います。札幌くらぶは、そんな私達を支えてくださっているわけです。昔と違い、今は演奏者と聴衆がキャッチボールをするような関係で、共に向上する時代です。楽員はそんな関係から、より努力し頑張る気持ちを生み出しています。交流会等、札幌くらぶができてから、そういう機会が着実に広がっており、感謝しています。

札幌交響楽団 第2 ヴァイオリン首席奏者

かわべ としかず
河邊 俊和 さん



新たに札幌に入団されましたが 簡単な経歴をお聞かせください

東京の立川市で生まれまして、神奈川県で育ちました。音大を卒業する間際に、父がドイツに赴任することになり、私も留学を考えていましたので、一緒にドイツに行きまして、ケルン音楽大学を卒業しました。その後、ドイツで学びながらリサイタルをやったりしてまして、スペインでコンクールがあって出場した時に、審査員の日高毅先生にご推薦をいただきまして、93年から九響のコンサートマスターを務めました。もう一度自分が思うように勉強し直したくて、九響退団後4年くらい神奈川フィルなどいくつかのオーケストラでゲストコンサートマスターなどをやりながらフリーで勉強し、今年7月に札幌に入団させていただきました。

札幌入団を希望された動機をお聞かせください

かかりつけのお医者さんが音楽好きで「札幌はいい音出しますよ」と聞いていました。また、第2ヴァイオリンの首席奏者の募集を知り、受けてみたい旨を最初にヴァイオリンを習った先生にお話ししましたら、先生の同級生が第2ヴァイオリンにいたので紹介しておこうとおっしゃってくださいました。北海道での生活に魅力を感じていたこともあり、3月の東京公演の時に実際に聴いてみたら、本当に素晴らしい音で、すぐオーディション受験を決意しました。

北海道と札幌の印象はいかがですか

まだ2か月しか生活していませんが、今年は暑くて本州と変わらないような気候でしたが、それでも夜になると涼しく、やはり北海道だなあと感じました。回りには緑が多く、道は広く、街もきれいで、何だか空気そのものがきれいな感じでさわやかな印象です。冬は大変だと聞かされていますが、今から楽しみです。

札幌は、とにかく楽員の方々が温かく接して下さり、大きな集団なのに、特に私のヴァイオリンのセクションなんかは男女比のバランスも良く、人間関係がスムーズでうれしく思っています。今は毎日が充実しており、大変楽しいというところです。

ヴァイオリンを始められたきっかけは何ですか

両親が、とにかく音楽好きでして、姉がピアノを習っていたので、「この子はヴァイオリンあたりがいいだろう。そうすりゃ、ファミリーコンサートもできる」というような発想で、3歳頃から習っていました。でも、自分で意識したのは、小学校高学年の頃、イツァーク・パールマンのレコードを聴いてひどく感動し、自分もこんな演奏をしてみたいと思ったあたりだと思います。

何か趣味はお持ちですか

卓球やテニスが楽しいと思うのですが、札幌ではまだ機会がありません。目下のところ、私は車の免許を持っていませんのでやっぱり自転車を使って、それが最大の趣味になっています。あの、顔に吹きつける風の感じが何ともいえません。先日は、キタラの近くの私のマンションから芸術の森までママチャリで行きました。

今後の活動の抱負などをお聞かせください

オーケストラには様々な経歴や考えを持ったプロが集まっています。そういう人たちと、オーケストラとしてだけではなく、様々な形のアンサンブルを楽しみ、聴衆の皆様にも楽しんでいただきたいし、ソロも楽しんでいただきたいと思っています。とにかく多くの方に、様々な形で名曲を楽しんでいただきたいし、自分がそれをお手伝いできれば、といつも思っています。

最後に札幌くらの印象をお聞かせください

日は浅いのですが、楽員の一人として応援して下さる皆様に感謝しております。

(インタビューー 佐藤良次)

FAN NETWORK

今回は交流会での会員と楽員の皆さんの声特集です

演奏会で見たばかりの人に会え、つながりが深くなった気がしてうれしいです。神戸出身の楽員の方に「北海道は遠かったでしょう」と話したら「札幌は都会だし、楽しく暮してます」と言われ、うれしかった。
(会員 村井俊博さん)

演奏が終わった後は気持ちもゆったりしているし普段話す機会のない「くらぶ」の方と語り合えてうれしいです。
(Va. 荒木聖子さん)

「今日の演奏どうでした」とおそろおそろ聞いたら、反応がよく、うれしかった。そんな会話ができるのもいいですね。
(Tba. 香川千楯さん)

今日はサッカー日本代表が決勝トーナメントに進め、気持ちよく演奏でき、その直後にファンの方々と話もでき、とってもうれしい。
(Timp. 真貝裕司さん)

気持ち的に、ゆっくり話せてよかった。またぜひこういう機会を持ってほしい。演奏会にももっと足を運ぶ人が増えるよう願っています。
(Cl. 多賀 登さん)

演奏後の高揚感のある中で話して、皆さん楽しんでですね。私は普段、電話でお話する会員の方に会えて良かった。「有珠噴火で演奏会に行けない」とおっしゃられていた方とも話せました。
(事務局 中谷由美さん)

なごやかな雰囲気楽員の方と話せてよかった。(自宅のある)洞爺で札幌の演奏会があるのを楽しみにしています。
(会員 高野ケイさん)

演奏会が終わって、こうして話をすると、この方々に支えられ札幌はあるのか、と絆が深まった気がします。
(Cb. 藤澤光雄さん)

演奏会後なので、今日の演奏の話もでき、興味深かった。ざっくばらんな雰囲気がうれしいですね。
(Perc. 大垣内英伸さん)

演奏中は意外に孤独で、拍手や入場者数でしか反応を測れない面があります。交流会は、例えば手作りの名札ひとつ取っても、こういう人たちに支えられていると思え、勇気が出てきます。

(Va. 鹿島淑子さん)

演奏会後の交流会はもっと増やしてほしい。(自宅のある)江別の音楽文化について話し、札幌の演奏会が地元でもっと増えれば、という話をしていました。
(会員 安井俊博さん)

いい雰囲気交流会ですね。(楽員と会員)双方がさらに交わられるような工夫ができれば、もっと楽しくなると思います。
(事務局 遠藤恵子さん)

この人がさっき演奏していた人か、と親近感がわきました。演奏者がどういうイメージで曲作りをしているのかもたずねられたし、よかった。

(会員 上田英彦さん)

楽しかった。札幌にはゴルフクラブがあり、年7回、平日にゴルフをしているのですが、そこでも交流できればなんて話をしていました。

(Fg. 村上 敦さん)

ステージの姿を見た直後だけに、一緒に話せて身近に感じられました。楽員の方の給料の額まで聞いちゃいました。
(会員 鈴木美保さん)

非常に楽しい。私は、趣味の山登りのとき、リコーダーを持って行って仲間の歌の伴奏をするのですが、今日は楽員の方と「笛」談義ができました。演奏会後だけに、楽員の方も話しやすそうですね。

(会員 佐々木幸雄さん)

私の場合、頭が「演奏会モード」から戻るには、やっぱり3、4時間かかります。だから、直後の交流会は、ざっくばらんな雰囲気の方がうれしいですね。話も盛り上がるし、こういう機会は必要だと思います。
(Ob. 岩崎弘昌さん)

編集後記

13号に登場して頂いたニキティンさんが東響に移られる、と定演のプログラムに案内がありました。10月の定期で挨拶されるそうですが、残念な気持ちと、一層のご活躍を期待する気持ちが半々というところです。

また、13・14号に回想を寄せてくださった海

藤さんも定年を迎えられたとのこと、あのお姿を見られなくなるのか、と思うとさみしい気がします。

最近、新入団員の紹介も結構ありますが、やはり、ゆっくりと札幌も変わっていているんだなと思わされます。
(佐藤良次)